

佳作

最後のメッセージ

東京都 武蔵野女子学院中学校二年 荒川 葉菜

私が小学三年生の頃、夏休みに入ってから日も浅いある日の話。その時の私は、塾のテストで満点を取り、嬉しくてたまらなく、早く家に帰って家族に見せびらかしたいという気持ちで帰途についた。

玄関を開けると、なぜだか家の中が騒がしく、家族全員が青ざめた顔をしていた。近くにいた祖母に、「おばあちゃん。どうしたの。」

と話しかけると、祖母は一瞬ためらいながらも、その重い口を開き、こう言った。

「おじいちゃんが大変なのよ。」

祖母の話からすると、私が塾に行っている間、皆で早めの夕食をとっている最中、祖父が急に倒れて意識を失い、救急車で搬送されたらしい。

しばらくすると、病院から電話がかかってきた。たった今、祖父が息を引き取った、という内容だっ

た。祖父は、脳梗塞だった。

突然のその出来事に、頭が真っ白になった。塾のテストで満点を取ったことも、忘れるくらいに。

何より一番悲しかったのは、もう一生、祖父に会うことができない、ということだった。

今まで、祖父は私をずっと支えてきてくれた。私が悲しんでいると、「大丈夫だから、元氣を出して」と励まし、私が喜んでいると、一緒に笑って喜んでくれた。そんな祖父が大好きだった。

祖父が亡くなった日の翌日から、私には生きることが恐怖という感情が芽生えた。そして、食欲も無くなり、目に見えるもの全てが灰色へと変わっていった。

その日の夜、私は一つの夢を見た。辺りを見回しても誰もいない。暗くて何も見えない。しかし、本当は怖いはずなのに、なぜだか自然と怖くはなく、どこか暖かい感じさえした。すると、空から祖父の声がした。

「葉菜、これから辛いことがあっても、前を向いて、笑顔を絶やさず生きなさい。」

その一言だけを残して、祖父の声は途絶えた。気がつけば、朝になっていた。

そのような出来事から約五年が過ぎようとしてい
る今、思い返してみると、祖父はあの時、私に別れ
を告げるとともに、いつものように、励ましてくれ
たのではないかと思えてくる。祖父のあの言葉があ
ったからこそ、私は死の恐怖と向き合い、前を見て
進んでいくことが出来た。だから、とても感謝して
いる。

これから先、生きていくうえで、大きな壁にぶつ
かる日は、そう遠くないかもしれない。それでも、
しっかり前を向いて、笑顔を絶やさず生きようと思
う。「前を向いて、笑顔を絶やさず生きなさい」そ
れが、祖父からの、最後のメッセージだから。